

ラジオ放送  
＜平成25年10月～12月放送分＞

ON AIR



金光教の声  
No.405



## もくじ ~ contents

### <信心ライブ>

☞ 金光教の集会で行われた発表や講話などを紹介します。

- 第1回 春風のような心で *page 1*
- 第2回 鼻紙を忘れんように *page 4*
- 第3回 大根一本でも *page 8*
- 第4回 人生の常備薬 *page 11*

### <信者さんのおはなし>

☞ 金光教の信者さんの体験談を紹介します。

- 親父の龍笛 *page 15*
- お世話になり続けての今日 *page 19*
- 大きな温かい懷に抱かれて *page 23*
- 神様が使ってくださるのだから *page 27*
- 本当の元気！ *page 31*
- 今になって分かるあの手紙 *page 35*
- 神様が与えてくれた仕事 *page 39*
- 心の美人になりたくて *page 43*

## 《信心ライブ》

### 第一回「春風のような心で」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、福岡県直方市民会館で行われた講演会で、当時金光図書館長であった高橋行地郎さんが、平成七年四月にされたお話を聞いて頂きます。

この講演会のタイトルは、「喜び上手・感謝の名人」でした。

高橋さんは、「日本は、ものは豊かな国になっただけで、それに反比例して心が貧しくなってきた」と感じられ、日々、「喜び上手・感謝の名人」になるべく、稽古に取り組んでお

られます。

私は少しづつ稽古をさせて頂いておるのでございますけれども。例えばですね、小川洋子さんといい芥川賞作家の方がございますけれども、私の親戚筋に当たります。小さいころにお習字で金賞をもらったんです、金賞。それで、おじいちゃんの所へ、「おじいちゃん、金賞をもらいましたよ」と報告に行きました。そうしたら、ご褒美を頂いた。その袋の上に、中におそらくお金が入っていたのだと思いますけれども、袋の上はどう書いてあったかというところ、**「ご褒美」**でもない、**「お祝い」**でもない。どう書いてあったかというところ、喜ばせてもらってありがとうございます。そのお礼として、**「喜ばせて**

もらったお礼」というふうに書いてあった。

これは、私は小川さんから聞かせて頂きまして、なるほどなあ、と。そういうおじいちゃん  
の心というのがですね、何十年も経った小川さん  
の心の灯ともしびになっておると、こう言っ  
ておじいさんが、「喜ばせてもらったお礼」と書  
いてポチ袋を孫に下さった、そのことで、ほの  
ぼのとしたものを子どもながらに感じておる。  
これは時間が経っても忘れないんですね。そう  
いうものをおじいさんは孫にバトンタッチをし  
ておる。

そういうことで、昔はそのようなことがあっ  
たんだと思うんです。ところが、段々物が豊か  
になってきた時に、果たしてその心がどこへ行  
ってしまったのかなあと、これは私のこととし

て色々と思わせられる訳でございます。

『概念概念砕き』。これはちよつと難しい言葉で  
ございますが、既成の概念というものが、色々  
私どもが生活をしていく上であります。たくさ  
んの概念に囲まれています。そういうものを元  
にして、ものを考えたり、生きていたりしま  
す。

あるいは、慣習とか常識とか、通念とかいう  
ような物差しでもって、生きていくということ  
も致しますけれども、そういうもので生きてま  
いりますと、なかなか本当のものが見えない。  
本当の関係がつかない、というようなことにも  
なるようでございます。でありますから、私は  
そういう時に心のチャンネルを切り替える、と  
いうことを稽古させて頂くようなことござい

ます。

一つのこと凝り固まらない、可能な限り柔らかに大きくて広い心にならせて頂く、そういう考え方にならせて頂きたいなあと思っています。

私のとても好きな歌がございます。この頃になるといつも思い出す歌でございます。それは、

「春風のごとき心を持ちたしと吹く春風に吹かれつつ思う」

春風のような心、どんな心なのでございましょうか。自分もほんわかとしてくる、人様にもその温もりが伝わっていく、温もりの花が咲い

て、喜びの芽が吹く、そういうことであろうかと思わせて頂きます。そういう心にならせて頂きますと、閉ざされていた世界が開かれてくる、そういうことにもなるのではなからうか、というふうに思わせて頂きます。

いかがでしたか？ 小川洋子さんとおじいさんのエピソード、「喜ばせてもらったお礼」というのがいいですねえ。話を聞かせてもらったこちらの方まで、ほんわかした温かいものを感じませんでしたか？

高橋さんは、このお二人のやりとりから、既成概念にとらわれない考え方を大切に思い、春風のような心を連想されたんですね。自分だけでなく、人様にまでその温もりが伝わっていく、

そういう心になると、世界が喜びであふれてくるのかも知れません。私も、春風のような心になりたくなりました。皆さんもどうですか？

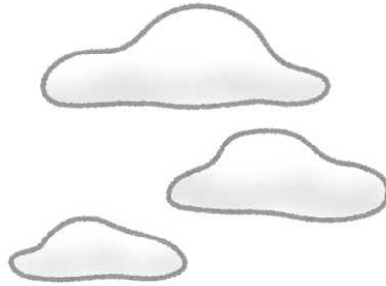
## 《信心ライブ》

### 第二回 「鼻紙を忘れんように」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今朝は、平成二十年四月に行われた金光教本部の祭典でのお話を聞いて頂きます。話し手は、岡山県豊原教会の小林晋すすむさんです。

親の気持ちというのは本当に面白いというか、不思議なところがあります。可愛くて可愛くて仕方がない。病気でもすれば、元気になってくれたらそれだけでいい。それで百点だ、と思う。でも、いったん学校へ行くようになって勉強しなかったら、百点取らなかったら、百点



じゃあないんですね。

そんな思いになって、いつの間にやら子どもを責めたり不足に思うようになる。でも、本当に可愛いという親の心というものは、そんなもんじゃあないと思うんですよ。

あるお宅で、九十過ぎの寝たきりのおばあちゃん、どこが悪いというのではありませんが、老齢で休んでおられる。その親孝行の息子さんが、息子さんと言っても、もう七十近い歳になつておりますが、ある時、「おばあさん、これからちよつと出て行くが、おとなしくしてなさいよ」と声を掛けた。すると、「おう、おまえか。どこへ行くのか知らんが、お前は子どももの時からよく鼻を垂らしてたんだが、鼻紙を忘れるように持って行きおるか」と。

自分の下の世話をされているおばあちゃん、  
「お前は子どもの時からよく忘れて大変だった、忘れんように持って行けよ」と、こう  
いうふうに言われたそうであります。

我が身が自由にならないような状態でありながら、我が子の心配をするという、それが、可愛いと思う親心、我が身を忘れて、我が子が可愛いと思う、そういう熱い気持ちの親の心なんです。そこには計算もないんですね。この子を育てて一人前にして、先々養ってもらわなければならん、みたいなことはない訳なんです。本当の親心は、子どもが可愛いという心だけで、可愛くて可愛くてたまりません。そういう気持ちで一生命子どもを願っているのです。



そういう親のような心、可愛いと思う心、これが神心である。可愛いと思う心がそのまま神である。こう言われているのであります。

先程申しましたように、大勢の子どもを見て、よく見たら家の子が一番可愛い。うちの孫くらい可愛いのはおらんぞ、と言うのでありますけれども、まかり間違えたらどうなるかと言いますと、「あんたみたいに言うことを聞かない子は家におらんでもいい」というような要らぬことを言ってみたりする気持ちも起こってくる。そういうところが、人間が神様ではないところなんです。

神様は、言うことを聞こうが聞かまいが、すなわち、「無信心者ほど神は可愛い」というふうに言われている。信心するからしないからで

はないんですね。天地の間に住む人間は皆神の氏子である。みんな可愛い神の子である。全く分け隔てがないんです。

ところが人間は、ともすると、自分の思い通りになっておりまして、「いい子」であるし、思い通りになりませんと、「困った子」ということになります。でも、本当に困った子なんかはいません。大事な子なんです。あれには困ってます」と。確かに、いろんな問題を起こしますと、親とすれば心配であったり、困ったりするのであります。でも、困ったり心配する前に、どんな子なのかと言うと、大切な大事な、可愛い可愛い、大事な子なんです。

その大事な子なのだといいことを忘れないようにするためにどうするかと言うと、やはり、

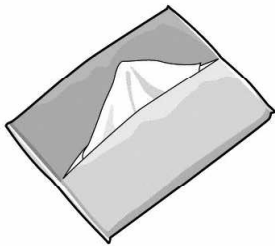
神様から授かった命、尊い命の持ち主である子どもでもある。そういう気持ちで子どものことを思わせて頂くことが大事なことではないかと思うんであります。そして、そういう親心を頂いて、お互いに育ってきているということではないのかな、と思うのであります。

いかがでしたか？

子どもに対する親の心って、切なくて、何とも不思議な心だと思いませんか。とにかく子どもが可愛い。どんな時でも、どんなことが起っても、「どうか幸せになつて欲しい」と、ただそれだけを思っているのが親の心なんですね。

そんな親の心が、実は神様の心と同じなん

す。神様と言うと、私たち人間の側から神様に向かつてお願いするものとはかり思っている方も多いと思うのです。でも、実は神様の方から、私たち人間に対して、「どうか幸せになつてくれ」といつも願って下さっているのです。私もお話を聞きながら、神様から願われている自分というものを、改めて見直してみたいと思うようになりました。



《信心ライブ》

### 第三回 「大根一本でも」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、金光教阪急塚口教会の前教会長・古瀬真喜太郎さんが、昭和五十八年四月、教会でのお祭でお話されたものを聞いて頂きましょう。

今から三十年ほど前に、塚口の市場の八百屋さん、だんだんと落ち目になって、商売がうまくいかない。それで、借金も出来てくるし、お先真っ暗という。そこで、お参りをして来られた。

ただ頼むだけの神参り。世間で、みな「信心」と言うたら、頼むだけの信心。頼むだけのお参りという。それでお札を買ったり、お守りをもろうたりして、それでもう済んだと思うておる。そんな信心じゃないんだと。

「あなた、天地に生かされておる。その天地に生かされておるといふことを、本当に真面目に考えないかん。真剣に考えないかん。あなたが売っておられる大根でも、八百屋さんですからね。大根、ニンジン、キュウリ、もう一切のあなたが扱っておられる商品品物は、天地のお恵みなくしては、有り得ないものばかりをあなたがお商売に使っておられる。それを売って生きておられる。それをあなたは単なる物に過ぎない扱いをしておられる。それは、大根やニン

ジンに対して、そして、それを作って下さった  
天地の大きなご恩に対して、人間らしい温かい  
心を全然向けておらん。ただ、もうけたいもう  
けたいという、そういうものの扱い方、考え方  
だ。それを改めなければいけない。

ただ願うだけじゃない、そういうふうにな、  
天地を軸にして、そして自分の生き方を考えて、  
改めるところは改めていくことによって、あんな  
たの生き方が本当に立ち行く生き方になられる  
んで、だからこれからは、『天地の親神様、色  
々のたくさんの種類の青物をお作り頂いてあり  
がとうございますと。その作って頂いた物を売  
らせて頂いて、商いをさせて頂きます。どうぞ  
皆様のお役に立つような御用になるよう、商売  
になるよう心掛けて参りますから、どうぞ青物

を大切に扱わせて頂きます。神様がお作り下さ  
った大切な天地の命が、白い大根となり、赤い  
ニンジンとなり、青いキュウリとなり、そこに、  
食べられる方々が、色彩が豊かにね、色々の彩  
りで、料理をおいしく作って頂く。そうまでし  
て下さって、お作り下さってる神様の深いみ心  
を、ありがたく頂いて商売をさせて頂きます』  
と、そういうふうにならないかん」と、話を致  
しました。

それから三回目に参加して来られた時、「雨の  
日であるのに、三千円多く売らせて頂くことが  
出来ました。ありがとうございました」と言う  
んですね。「ただ青物を買ったらええわ」とい  
うような、そんなぞんざいな商売だった。それ  
が、大根一本でも、キュウリ一本でも、人の命

のために、天地が、ニンジン、ニンジン、キュウリはキュウリ、ゴボウはゴボウと、本当に、人の命のために、これを食べると人間が、いきいきと健康で働けるといふ、そういう人間の命のため、神の氏子のため、神のいと子のために、一つひとつの青物に、お心を込めて下さつてある。神様から、人の命のためにお作り下さつた大切な命の根元となるものを扱わせて頂いておるその自覚というもの、大切な扱い方をさせて頂くということによって、喜びを頂かれたわけでありませう。

いかがでしたか？

お仕事で野菜を扱っておられる八百屋さんへの力強い言葉。食べ物や、食べ物の恵みをもた

らす天地への深い感謝の思いが、ほとぼしるようです。天地の恵みあればこそ、私たちは生かされ、生きていくことが出来ている。青物に限らず、商売で扱うありとあらゆる品物も、本を正せば、天地の恩恵なくしては、有り得ないものばかりなんです。天地あればこそ、ビジネスもさせてもらえるのです。

天地の恵みがあり、色々な人たちの働きがあって、今の自分がある。全てを生かし、育んで下さる神様のお恵みに思いを馳せながら、今日から暮らしてみませんか？



《信心ライブ》

第四回 「人生の常備薬」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、金光教の願いを受けて設立された金光八尾中学・高等学校と、金光藤蔭高等学校で宗教の授業を担当されている近藤正明先生が、平成二十二年二月に研修会でお話された内容の一部をお聞き頂きます。

宗教の授業ってというのは、受験の特効薬は配られないけれども、消費期限のない「人生の常備薬」を配らせてもらっているようなものだから、絶対にあなたたちには損はさせないから、

三年間頑張って、週に一時間、宗教の授業を受けてなあ、と言って、お願いして始めるようなことなんですけれども。

実際にそうしたらどんな授業をしているのか、と。

「ほんまにつらい、苦しい時は鏡を見てみなさい」と言うんですね。鏡というのは顔を映しますけれど、その顔はその時の心の状態を映します。腹が立っている時の顔を見ると、「えっ、私、こんなに悪い顔なん？」と映る訳なんです。うれしい時に見れば誰でもべっぴんさんになるし、イケメンになる訳なんです。そういうふうに、鏡というのは不思議な力を持っているんですけれども。

その鏡を見て、「つらいとか、悔しいとかあ

れもこれも欲しいという自分中心の心、つまり『我』を取り去る稽古をしなさい。鏡から『我』を取るとどうなりますか？ 『カガミ』から『ガ』を取ると『カミ』、つまり神様のような心になります」というような話を生徒たちにするんです。そう話すと、生徒たちは次の休み時間鏡を見出すんですわ。ほんまに。

まあ、そんな話をしたりするんですけども、正直な話を申しますと、宗教を伝えるというのは非常に難しいです。やっぱり、一番の土壌のところ、何が今行われていないかと言ったら、本来昔でしたら、家庭で行われていたはずの、そういった目に見えないものに対する「畏敬の念」であるとか、「感謝の心」であるとか、いわゆる、宗教的な信仰心とまではいかないまで

も、そういったものに対して、へりくだった気持ちを持つといったものが、おそらく昔は大家族の中で、おじいちゃんやおばあちゃん、あるいは、お父さんやお母さんが口で説明しなくても背中であげていたと思うんですね。目上の人を敬うとか、お年寄りを大切にするとか、人を大事にするといったことは、家の中で自然に教育されていた。それが現在はない状態で、正直な話、社会に放り出されている。

やはり、今の高校生年代の子どもたちにもがちなのは、自立していく過程で大事なことです。誰の力にも頼らへん」「自分一人で生きていくんだ」、また、「自分一人で生きられるんだ」という勘違いですね。この勘違いが、実は、大きな勘違いなんやで、と。

そうした勘違いに対して、人間は誰も一人では生きていくことが出来ず、全てあらゆる人や物のお世話になり、つまり、「生かされて生きている自分である」ということを自覚してもらえるように、そして、自分を生かしてくれている存在に感謝の気持ちを持つということを、いろいろな例え話、具体例をあげてお話させて頂いているようなことであります。

私にとって生徒たちに一番伝えたいことは、宗教を信仰することは特別なことではなく、空気を吸うことや、ご飯を食べることのように、神様に手を合わすことは大事なことだということとを伝えたいんです。日常の生活の中に、普遍的にそういった信仰の世界があり、目には見えなくても、私たちを生かし育んでくれる空気、

太陽、水などに対して、使う時にありがたい、うれしいという感謝の気持ち、そして畏敬の念を持つことが大事だと思うのですね。

近藤先生は、一年生の最初の授業で必ず、「先生、神様って本当にいるの？」と聞かれるそうです。

そんな生徒さんたちにとって、「宗教の時間」は、水や空気、太陽の光といった、あることが当たり前と思いがちだった恵みに気が付く時間であったり、鏡を見て自分を見つめ直したりする時間であるかもしれませぬ。

自分の命を支えている働きや、心といった、なかなか目に見えにくいことに目を向けさせてくれる近藤先生のお話は、いつの日にか、「人



生の常備薬」となって、こころの根っこ、命の元を元気にしてくれるように思いました。

改めて私も、鏡を見てどんな顔をしているのか確かめて、今日一日を笑顔で過ごしたいと思います。



## 「親父の龍笛」

ピシッ。

笏しやく拍子ひょうしと呼ばれる拍子木の音を合図に、横笛の一種である龍笛りゆうてきや箏ひちりき、笙しょう、琴などの伝統楽器による演奏が始まります。金光教本部のお祭りは、この雅楽にも似た儼かな音楽とともに進められていくのです。金光教ではこれを、「祭典の音楽」という意味で「典楽てんがく」と呼んでいます。

今から十年前のことでした。兵庫県三田市に住む金岡孝雄さんは、金光教本部の祭典に参拝していました。典楽の演奏者席のすぐ近くに座って、金茶色の装束に身を包んだその人たち、とりわけ、笏拍子を持って始めと終わりの合図

を出す指揮者の姿を見つめていました。

「ああ、親父が生きていたら、今、あそこに座っているんだろうな」

一カ月前に亡くなったお父さんは、長年にわたって典楽の演奏や指導に当たり、典楽会の会長も務めた人だったのです。

やがて指揮者はおもむろに笏拍子を手に取り、終わりの合図を打つ構えに入りました。その瞬間、どこからか、「ピシッ」と鋭い音が響き、何事も無かったかのように、曲が静かに終わりました。一人指揮者だけが、戸惑って辺りを見回していました。指揮者はまだ、笏拍子を持っていなかったのです。

「親父、やったな」と、孝雄さんは思いました。お父さんのいたずらっぽい笑顔がまぶたに

浮かびました。「この秋のお祭りには、典樂のご用をさせて頂くと行って、楽しみにしていたからなあ。親父、願いがかなって良かったな」

お父さんは、若い頃、九死に一生を得た経験がありました。戦争中、敵の弾が頭をかすめ、血を流して気を失っていたところ、戦死者として葬られる寸前に、助け出されたのです。

その時、神様に救って頂いた我が命を、生涯神様のご用に捧げようと決意したのでした。教会や本部で、お祭りの時に典樂を奉仕するようになったのも、その時の決意に基づくものでした。そして、龍笛を始め、様々な樂器の技術を磨き、自ら演奏するだけでなく、多くの後輩たちを育てていきました。

もちろん、このことに対して、どこからも報

酬が出るわけではありません。家業である染物店の仕事をやりくりし、交通費も食事も宿泊も、全て自己負担です。しかし、これも日々生かされていることに対する神様へのお礼だと考えていたお父さんに、迷いはありませんでした。その表情からは、典樂の奉仕を通して神様のお役に立ち、人にも喜んでもらえることが、何よりうれしくありがたいという気持ちがあふれ出ていました。

その様子を見ながら育ってきた孝雄さんは、お父さんを尊敬し、その生き方に憧れてもいました。時には、どうしてそこまで思うこともありましたが、お父さんが重い病気を抱えながらも元気に過ごしているのを目の当たりにすると、神様にお礼を申さずにはいられないその気

持ちが納得出来るのでした。

お父さんは何度かがんの手術を受けたことがありました。中でも特に大変だったのが、大腸がんの手術でした。八時間以上にも及ぶ手術は結局失敗に終わり、再手術を受けました。ところが、その後何日待っても腸が動く気配が見られません。孝雄さんは心配になって、医師の姿を探しました。しかし医師は、孝雄さんを見るなり、くると向きを変えて隠れようとするのです。孝雄さんは追いかけて言いました。

「先生、逃げないで下さい。どうなんですか、もう一度手術しなければいけないんですか」

医師は申し訳なさそうに、「そうなんですが、言い出せなくて」。

「大丈夫。うちの親父は、そんなことで怒っ

たり落ち込んだりはしません。先生、もう一度一緒に頑張らしましょうよ」

孝雄さんは自信を持って、医師を励ましました。お父さんにも説明しました。

「先生が、もう一回手術させて欲しいって。先生は面と向かってよう言わんらしいから、僕から話すって言ったんだ」

するとお父さんはニコツと笑って、「そうか、そうか、一緒におかげを受けないかな。手術が成功しないことには、その先生も助からんやから、何とかおかげを受けて欲しいなあ」。

病人が医師のことを思いやっているのがおかしくて、クスツと笑いながら、「親父らしいなあ」と誇らしく思ったのでした。

三回目の手術は成功しました。退院に当たっ

て医師から言われたのは、「大腸のほとんどを切り取ったので、食べ物水分を吸収しきれず、これからは下痢のような状態が続くだろう。また、脱水症状を起こしやすいので、週に何回か点滴をしなければならぬ。遠出をするのはもう無理だ」ということでした。

ところが、それからずっと便も普通に出て、不自由なく生活が出来たのです。何より楽しみにしていた典楽の奉仕に、泊まりがけで出掛けることも度々でした。そして命ある限り、いや、あの笏拍子の音がもしそうなら、生き死にを超えてと言うべきでしょうか、神様のご用に打ち込んだのでした。

お父さんが亡くなってから、遅まきながら、孝雄さんも龍笛の稽古を始めました。お父さん

が愛用していた龍笛です。いつも、「親父、僕の体に入って、上手に吹いてくれよ」とお願いしながら、演奏を奉仕しています。

霊前に掲げたお父さんの写真は、優しいまなざしで、孝雄さんに語り掛けます。

「神様を使うより、神様に使って頂けよ。そうすれば、何も心配は要らんからなあ」。



## 「お世話になり続けての今日」

新潟県新潟市。日本一長い信濃川が海に注ぐこの街に住む吉田としさんは、昭和六年生まれの八十二歳。すらりと若々しく、上品で、落ち着いた笑顔が魅力的です。金光教を信心していた吉田家へ嫁ぎ、信心を進めて来ました。歯科医院を開業していたご主人が現役を退いた後、秋田県から夫婦で新潟市に転居し、暮らしています。

歯科医の妻として、三人の子どもの母親として、夫の病気や息子の進学のことなど、これまで、色々なことを乗り越えて来たとしさん。乗り越えて来たことの一つひとつが、穏やかで幸せな、今の生活につながっていると、心から感

じています。

結婚の時にも、こんなことがありました。婚約からわずか二カ月後の昭和二十四年二月、秋田県で季節風による大火災が発生、二千五百戸もの建物が、一夜にして焼失したのです。としさんの実家も、全てを失ってしまいました。「花嫁修業も嫁入り支度も出来ないのでは、申し訳がないから」と、縁談の撤回を申し入れると、「体一つで来てくれたらいい。娘として、育てますから」と、義理のお母さんが、温かく受け入れてくれ、その年、十八歳で結婚したのです。嫁ぎ先の吉田家は旅館を営み、ご主人は、同じ敷地内に歯科医院を開いていました。としさん夫婦の他、両親と祖母、兄弟たちも同居する十一人の大家族で、住み込みの従業員もいまし

た。

結婚式の後、花嫁姿のまま金光教二ツ井教会へ、生まれて初めて参拝したとしさんは、吉田家の人たちが、金光教の信心をしていることを、この時初めて知りました。

吉田のお義母<sup>かあ</sup>さんは、ただの一度も、としさんを怒ったり、嫌味を言ったりすることはありませんでした。家庭内の様々な苦勞に負けず、一途に家を切り盛りするお義母さんの姿に教えられ、導かれていったとしさん。けれども、心からの信心が出来るようになったのは、思い掛けない病を患ったことが、きっかけでした。

昭和三十五年、二十九歳の時、結核と診断され、一年間の入院を言い渡されてしまいました。結婚後、この頃までに、夫の兄弟なども進学や

就職で家を離れ、祖母は世を去り、旅館も廃業

していました。一方、としさん夫婦は、男の子二人、女の子一人を授かって、男の子二人は、小学生になっていました。女の子は、まだ二歳のやんちゃ盛りで、可愛さもひとしお。子どものお世話と歯科医院の経理は、夫の妹に任せました。

入院の日、としさんは、後ろ髪を引かれるような思いで、子どもたちを置いて家を離れ、遠い町にある大きな病院の小さな個室に入りました。

その夜の事です。寂しいとも、悲しいともつかない心持ちがして眠れません。その時、ふと手に取って開いてみたのが、お義母さんが持たせてくれた金光教の本でした。

「今、天地の開ける音を聞いて目を覚ませ」

聞いたこともない言葉が目飛び込んできました。神様に頭をバーンと何かで叩かれたような衝撃を受け、知らぬ間にベッドの上に座り直して手を合わせるとしさん。その目からは、止めどなく涙が流れ出るのです。

「神様は、素敵な家族の元へ嫁がせて下さった。仕事に熱心で、優しく真面目な夫やその両親、大勢の家族に大事にしてもらい、可愛い子どもたちも授かった。こうして病気をしても、全てを任せて治療を受けている。こんなにおかげを頂いていたのだなあ。なのに、少しもそれを、分かっていなかった。神様、申し訳ありません」。こんな思いが、心の底から湧き起こってきたのです。

実家のお母さんが、としさんの好みそうな食べ物を用意しては、訪ねてくれ、教会の先生の手紙にも励まされながら治療を受けました。そして、わずか五カ月で退院することが出来たのです。それ以来、としさんは、毎朝、毎晩、真剣に教会にお参りするようになりました。

その後も、お世話になった夫の両親を看取り、二度に及ぶご主人の大きな手術も、子供たちの成長も、神様のお働きの中で、いいように、いように展開してきました。歯科医師となり、新潟で開業した息子さんの提案で住まいを処分し、先祖代々のお墓と共に、新潟へ移って、はや九年になろうとしています。

今、自宅の神棚に、「すべて世話になりつづけ来て 今日がある 老いわが今の いのち



なりけり」という、金光教の前の教主の歌を掲げているとしさん。「年を取って来ますと、このお歌が、ずしんときます。『すべてに礼を言う心』を、私は、このお歌から頂きました」と、話します。

毎晩、夕食の片付けを終えた後、流しやお鍋、食器に向かって、「食事のおかげで、健康な心と体を頂き、後始末も済ませました。今日も元気で食事を作らせて頂きありがとうございます。神様御礼申し上げます」と、こんなお礼のお祈りをするのが、としさんの日課になりました。としさん流の、「すべてに礼を言う心」の現れです。

今、としさんの一番の楽しみは、毎日、片道二十分ほど歩いて金光教新潟教会へ参拝し、先

生と信心の話をすることです。縁ゆかりのある人たちの名前を一人ひとり唱え、神様に毎日祈る取り組みも、大病を患ったころからずっと続いています。

「神様は、どんな一日を、私に与えて下さるのだろう」と、今日もとしさんは、ワクワクした気持ちで、人生の道を、力強く歩んでいます。



## 「大きな温かい懐に抱かれて」

美しい夜景で知られる北海道函館市に暮らす佐藤真也さんは、昭和七年生まれ、八十一歳を迎えました。

バスに揺られ四十分掛けて、函館東部教会に毎日元気に参拝しています。午後二時からの祈りの時間にお参りして、心を鎮め、自分自身を見つめながら、神様と向き合う時間を大切にしています。夕食準備を始めるまでの午後の時間を教会で過ごすのが日課になっています。

金光教の信心をしていた両親は、佐藤さんが四歳を迎えるまでに亡くなり、お父さんの兄弟に育てられました。高校生のころ、教会の一室を借りて住んでいた伯母さんの元をよく訪ねて

いたため、教会は、我が家のような憩いの場所でした。

函館に生まれ育った佐藤さんは、高校を卒業して横浜の会社に就職します。お見合い結婚した奥さんの志保子さんは、十和田湖でガイドをしていた、スタイル抜群の秋田美人。両手で抱え上げ、軽々とお姫様だっこが出来る、華奢まろやかな体付きでもありました。志保子さんにとって、横浜伊勢佐木町での都会の生活は、見るもの、食べるもの、色々なものが驚きの連続で、毎日楽しく過ごすうちに、心も体も豊かになって、一時は体重が二倍近くまでなったこともありました。

佐藤さんは、志保子さんと毎日幸せに過ごしながら、遠く離れてしまった教会の先生との文

通を楽しみに、また励みにしていました。仕事のことや、その時々思ったことなどをしたためました。父親のように慕う先生は、叱ることもなく、否定することもなく、全て受け止めてくれました。北海道の大地のような広い心の優しい先生から返事が届くことを、いつも心待ちにしていました。東海道五十三次のはがきを毎日一枚ずつ届けたことも、心和む思い出の一つです。年に一、二度函館に帰省した時には必ず教会に参拝して、先生と触れ合う時間も大切に過ごしました。

佐藤さんをいつも温かく迎え入れ、包み込んでくれる先生に、いつしか大きな温かい神様の懷に抱かれているような、そんな安心感と信頼を覚えるようになっていくのでした。

平成九年、定年を迎え、意気揚々と函館に帰り、教会への日参を始めました。志保子さんも函館での新たな生活を楽しみにしていました。翌年、函館での生活にも慣れてきたある日のこと、いつものように参拝に向かおうとする佐藤さんに、志保子さんが、「魚を買って帰ってきて」と頼みました。参拝を済ませた佐藤さんは、生きのいい、おいしそうな魚を買い求め、志保子さんがうれしそうに喜ぶ顔を思い浮かべながら、家に帰りました。

家に入ると、何となくいつもと様子が違っていました。志保子さんの姿が見当たりません。奥へと進み、寢室のベッドの上で横になっている志保子さんを見付けました。

魚を買ってきたことを告げながら、顔をのぞ

き込みますが、返事がありません。返事が無いどころか、息をしていませんでした。

「えっ!? 死んでいる!? まさか…!」

とっさに志保子さんの体を揺すり、無我夢中で何度も名前を呼びました。目を覚まして欲しいと手を尽くしましたが、思いは届きませんでした。

志保子さんは六十歳。これから年金をもらって、更に楽しみが増えるという時でした。

あまりにも突然で、衝撃的な信じ難い出来事に、誰もがあたふたと動揺して取り乱すはずです。ところが佐藤さんは、確かに衝撃は受けたものの、なぜか心が落ち着いてきました。自分でも不思議でした。更に驚いたことに、ありがたい思いさえ湧いてきたのです。

志保子さんと過ごした日々を振り返ると、佐藤さんは幼いうちに両親を亡くしてしまったこともあって、「相手が死んでしまったら何もしてあげられない、生きているうちに精いっぱい尽くそう」という思いで過ごしてきました。志保子さんに思いを寄せながら、一生懸命に尽くし、悔いのない毎日を送ってきました。

時には、嫌なこと、腹が立つこと、殴ってやりたいとまで思うこともありましたが、そんな時こそ神様と向き合いました。「きっと神様は、このことを通しておかげを授けようとして下さっている。解決していくようにと願って下さっています」。そう思っ一つひとつ乗り越えてきました。

そして、寄り添い合い、支え合い、共に生き

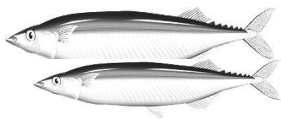
ている大切な命が終わりを迎えてしまう時は、  
どうか痛みや苦しみがなく、静かに、穏やかで  
あって欲しいと願っていました。

志保子さんの幸せそうな、穏やかな顔を眺め  
ているうちに、いつの間にか佐藤さんの心は、  
先生との触れ合いを通して感じてきた安心感に  
満たされていきました。さらに、先生の声が聞こ  
えてきたかのように、「すべて神様のおかげの  
中でのことなんだ」と、ありがたい思いへ導か  
れていきました。

そして、「志保子は神様の慈しみを受け、神  
様の元へ帰っていくんだ。これからも共に、大  
きな温かい神様の懐に抱かれていることに変わ  
りはない」と、次第にそう思えてきました。安  
らぎに満ちた穏やかな心の中に、「ありがとう

ございました」と、お礼の心が湧いてきたので  
した。

金光教では、「人間は、おかげの中に生まれ、  
おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでい  
くのである」という教えがあります。六十歳と  
いう、まだ若くて早いと思える別れでしたが、  
佐藤さんはこの教えを実感して、志保子さんと  
過ごした日々を、いつもそつと胸に抱き、お礼  
の心を大切に過ごされています。



「神様が使つてくださるのだから」

新潟駅から列車に揺られ、日本海に沿って北へ約一時間余り。車窓には、米どころ新潟らしく、一面に田んぼが広がります。山形県の少し手前にある城下町の村上市。かつて山の頂上にお城が建っていたことから、地元の人たちが親しみを込めて、「お城山」と呼ぶ小高い山の近くに金光教村上教会があります。

大竹憲一さんは、おじいさんからの信心を受け継いで、子どもの頃から、この村上教会に参拝しています。今年五十三歳。大工だったおじいさんが始めた建設会社を受け継ぎ、今は社長として、六人の従業員と共に忙しい毎日を送っています。

十代から大工の道に進み、師匠の下で修行を重ね、三十七歳の時には、一級建築士の資格も取った大竹さんは、毎朝、五時前には仕事に取り掛かります。職人さんたちが出勤するまでに、その日の仕事の段取りをつけておくためです。

忙しいのは、仕事だけではありません。三十年以上勤めている地域の消防団では、現在、分団長として市の中心部を任されています。その他、大工組合や建築組合に関わるほか、商工会議所の青年部OB会の会長や、地元のお祭りの役員も引き受けています。お参りしている村上教会では、お祭りの時に奏でる笛の練習を、週に一度、続けています。

建設業の仕事だけでも忙しい上に、幾つもの役を引き受ける大竹さんは、「神様が自分を使

って下さるのだから、使って頂いているだけです。出来ない時もありますが、それも神様任せです」と話されます。

「神様が、自分を使って下さるのだから」という思い。そんな思いが、大竹さんの中で確かなものになったのは、ある奇跡的な体験によるところが大きいようです。

それは四年前のことです。当時、大竹さんは、自宅から車で二時間ほど掛かる町の神社の屋根替え工事を請け負っており、現地にアパートを借りて、泊まり込んでの作業が続いていました。そして、九月末の金曜日のこと。屋根の上で作業の打ち合わせをしていると、頭が急に痛くなり、仕事どころではなくなっていました。一旦、アパートに戻り、その日は仕事を休みま

したが、翌朝、頭痛は治まっていたので、一日仕事をして、週末でもあったところから、二時間掛けて自宅に帰ったのです。

翌日の日曜日は、地元のお客さんに、前々から依頼されていた修理の仕事があり、休みを返上して作業に出掛けました。そして、週が明け、月曜日の朝。現場に向かうため、朝五時過ぎに資材をトラックに積み込み、ロープをかけて、最後に締めようと強く力を入れた途端、頭をバットで殴られるような激しい痛みに襲われたのです。転がり込むように自宅へ戻り、奥さんに病院へ連絡をもらいました。しばらく休んでから病院へ向かうと、すぐに検査、そのまま入院、手術をすることになりました。頭痛の原因は、くも膜下出血でした。家族には、「助か

「つても後遺症が残るかもしれない」と告げられたのですが、無事、手術は成功し、適切な治療と手厚い看護を受け、大竹さんは、奇跡的に助かり、わずか一カ月で退院することが出来たのです。

大竹さんは、この時の体験を振り返り、「何もかも、神様が助けて下さったおかげだ」と話されます。

後日、診察して下さった医師からは、二回、血管が破裂していたと説明を受けました。一度目の破裂は、金曜日に屋根の上で仕事をしている時だったのでしょう。あの時は、小さな破裂だったため、その後、休んで回復したのだと思います。でも、もしもあの時、屋根の上で二度目の時のような激しい痛みに襲われていたら、どう

なっていたか分かりません。

二度目の破裂が、月曜日の朝だったことも幸いでした。長い間、待つてもらっていたお客さんの仕事も、日曜日に無事済ませることが出来ましたし、もしも、現場との往復の道中で、トラックの運転中に出血していたら、どんな事故になっていたか分かりません。月曜日の朝、出掛けようとした矢先のことだったので、家族もそばにいてくれて、すぐに対応してくれたから助かったのだと、大竹さんは、あの日のことを振り返るのです。

そして、その後、何の後遺症もなく、現在まで元気に仕事が出来ていることを思うと、神様が、まだまだ自分を必要と思いい、使って下さっているように思えてならないのです。そんな思



いから、大竹さんは、仕事以外のことでも、頼まれることは何でも引き受けていかれるのです。

そして、ご自身のこれまでの歩みを振り返りながら、「神様は、いつも必要な時に必要なことを差し向けて下さり、助けて下さる」と話されます。

そもそも大竹さんが、自ら進んで教会に参拝するようになったのは、高校受験に失敗したころ、教会の奥様が、自分のことを心配して、懇々と神様の話や信心の話を聞かせて下さったことがきっかけでした。

「今思えば、あの時、受験に失敗してフラフラしていた私に、しっかり話をして下さったのも、神様からの差し向けだったと思いますし、

私が中学一年で父を亡くした時、知り合いの大工が、父に代わって会社に入ってくれ、自分の師匠となって育ててくれたことも、神様からの差し向けだと思えます。たとえつらいことや苦しいことがあっても、必ず神様が助けて下さると信じています」

そう力強く話す大竹さんは、今日も、朝早くから忙しく働きます。でも、それは、神様に使って頂いているという、大竹さんの喜びの姿なのです。



「本当の元気！」

皆さんは、自分が卒業した小学校や中学校、高校に愛着は持っておられますか？ 近年は、子どもがどんどんと少なくなり、学校が廃校になってしまったり、隣の学校と合併したり、という話題をあちこちで耳にしますね。

学校が無くなる時の式典、閉校式では、ポールに掲げられた旗が下ろされます。いよいよ本当に学校が無くなってしまおうという実感が湧いてくる瞬間、その学校を卒業されたPTAの方々の目からは涙があふれる瞬間です。そんな瞬間に何度も立ち会うことになった教育委員長が、今日の主人公です。

広島県に住む坂田さんは、現在六十五歳。今

年三月に教育委員会の委員長としての職責を最後に、四十年を超える公務員生活を終えられました。坂田さんの社会人としてのキャリアは、大学を卒業後、中学校の理科の先生になったのが始まりです。その後、三十四歳の時、学校から教育委員会へと職場が変わりました。

教育問題は、皆さんご存じのように、一筋縄ではいかない問題ばかりです。五十三歳で、教育委員長になってからは、いよいよ様々な問題に自らトップとして臨むことになったのです。

祖父母の代から金光教の信心をしている家庭で育った坂田さんのモットーは、「いつも元気に！」です。元気な心でいることが家庭や職場を明るくしますから、元気な心を頂けるように、毎日神様をお願いしてきました。

しかし、自分だけが元気では駄目です。親や

家族が病気になる、職場で元気に安心して働くことが出来ません。ですから、親や家族が元気でいてくれることも大切です。そこで、坂田さんは、親や家族への感謝の気持ちを込めて、「親孝行」を仕事の心得とし、職員に指導するようにしました。

親孝行は、先祖を大切にすることにもつながります。仕事がうまくいかない職員には、「今日はちゃんと先祖に祈ったか？」と言いました。職員の中には、仕事と親孝行が結びつかずに、いぶかしげな表情を浮かべる人もいましたが、坂田さんは気にしませんでした。親や先祖を大切にする気持ち、神様から元気を頂く元となり、明るく円満な職場の雰囲気を作る

のだと信じていたからです。

しかし、実際に直面する問題は、なかなか元気にはなれないことばかりです。学校の統廃合問題、保護者と学校との対立、地域の方々や保護者からの様々な要望、注文…。

学校の統廃合問題では、「学校を潰しに来たんだろ、外の者が勝手なことをするな!」「最初から統廃合ありきで、住民の意見なんて、全然大切にしないじゃないか!」などと激しい口調で詰め寄られます。

地域の方々のことを考えると、無理もありません。それでも、学校の統廃合問題に対しては、「子どものことを考えれば、少ない人数よりも大人数で教育する方が良い。必ず地域のため、未来のためになる」という、教育委員長として

の信念をもって臨みました。中には、坂田さんが先生になって初めて教えた中学校が廃校になり、坂田さんの手でその学校の旗を降ろしたこともありました。

坂田さんは、そのような教育委員長になってからの様々な問題を、「神様の愛のレッスン」として受け取りました。「神様の愛のレッスン」とは、お参りしている教会の先生から教えて頂いた言葉で、「直面している問題が苦しければ苦しいほど、つらければつらいほど、それは神様が与えて下さった試練であり、その試練を通して、本気で神様におすがりすることを神様が願っておられる」という教えです。神様が自分のことを願って下さっていると思うと、どんな問題でも、不安や心配が無くなり、元気な心で

取り組むことが出来るようになるのです。ちょうど家族の問題も重なっており、坂田さんは、ますます本気になって神様におすがりするようになりました。

坂田さんは教会にお参りし、とにかく自分の胸の内を洗いざらい神様にぶつけ、先生にお話します。神様からすれば、汚い、醜い心かもしれません。それでもいつも教会を出るころには、元気な心になっています。

坂田さんは、笑みを浮かべながら、「つらい荷物を神様にお預けし、楽しい荷物を我が家、職場に持って帰ることが大切なんです。そうすると、職場や家庭では、すがすがしい心で人接することが出来ます。これまでは、『から元気』でもいいからと自分に言い聞かせ、元気な

心を保つようにはしていました。でも、本当に神様とつながっていると、『から元気』が『から元気』ではなくて、本当の元気になっていくんですね。神様から見たら人間はみんな赤子ですから、自分の力で解決しようとしたら駄目なんです。そのことが分かると、しっかりと神様を土台にして生きることが出来るようになります」と語ります。

今年三月、公務員として、いよいよ最後の日、職場では退任のセレモニーがありました。「お疲れさまでした」。周りのみんなに声を掛けて頂き、これで全てが終了と感慨に浸る間もなく、最後の一仕事が待っていました。その日の夜、最後の最後の仕事、学校統廃合の説明会がまだ残っていたのです。それも交渉が大変難航して

いる学校でした。

「神様の愛のレッスンは最後まで続くなあと、坂田さんは、元気よく最後の仕事に向かいました。」



## 「今になって分かるあの手紙」

(俊明…。ありがとうね)

心の中で、何度も息子に語り掛ける。

(俊明…。どうしたらいいと思う？ 俊明…)

西美智子さんは、二十年前に、息子の俊明さんを病で亡くしました。二十一歳という若さでした。

俊明さんはバスケットボールが大好きで、インターハイで全国優勝したほどのスポーツマンでした。そして大好きなこのスポーツを後輩に伝えたい、広めたい、出来ればアメリカのプロバスケットボールリーグでプレーしたいと、希望を胸一杯に膨らませ留学しました。ところが

その矢先、悪性の腫瘍が見つかり、二年間のつらい闘病生活の末、帰らぬ人となったのです。

病室へ行くと、彼は必ず言いました。

「心配しなくてもいいよ、お母さん」

いつも、励まされるのは美智子さんの方でした。

西美智子さんは、広島県にある金光教廿日市教会にお参りする現在七十四歳の女性。ここ廿日市は、海を隔てた向こうに、厳島神社のあの真っ赤な鳥居が眺められる風光明媚なところで、彼女も大好きなご自慢の風景です。元々明るく元気で、周囲を魅了していた美智子さんですが、その彼女に起きた、あまりにもつらい出来事でした。

美智子さんは、岡山県の金光町で自営業を営

む家に嫁ぎました。そして、金光教と出会います。夫の母もそうでした。この家に嫁ぎ、金光教と出会いました。

義母は嫁いできたころ、この街は、他の街とは何かが違うと感じたそうです。顔見知りが増えるにつれ、「おやつ」と思いました。みんなが金光教の信者だったのです。何気ない会話の中にも、喜びが満ち溢れていて、義母もそうした人たちの温かい人柄に引かれ、自然とお参りするようになり、商売や家族のことを一生懸命に祈りました。

美智子さんはそんな義母の後ろ姿を見ながら過ごしました。実は、その義母は、美智子さんが嫁いでくる数年前に、二十六歳になる長男を結核の病で亡くしていました。

ある日のこと。亡くなった長男を祭る写真の前に、義母がこんな話をしてくれました。

「あんなあ…。この子がおらんようになったけど、わたしや、いつつこの御みたま霊様と相談しながら、他の兄弟のことや、困ったことなんかを話するんじゃない。するとなあ、あの子が答えてくれるんよ」と…。

「そんなことがあるもんか…。」。美智子さんは思いました。その時は、自分も同じ悲しみを味わうことになるうとは、知るはずもありませんでした。

義母との同居生活は五年ほどでした。夫が突然、家を飛び出し、広島で仕事を始めたのでした。夫は、兄と一緒に家業を手伝っていたのですが、独立したいとの思いが強かったのです。

美智子さんも、周囲の反対を押し切り、後ろ髪を引かれる思いのまま、子供を連れて、夫の居る広島へやって来たのです。今から五十年ほど前のことです。

しばらくして、この若い夫婦のもとに、夫の母から手紙が届きました。

兄が居るとはいうものの、家業を捨て、飛び出して行ったこの夫婦への思いが次のように書きつづってあったのです。

「…自分なりに親らしい務めを精いっぱいして参りました。しかし、その努力は空しく灰となり、泣き悲しまねばならぬことになりました。…家のため、あなたたちのためと、祈りつつ、一生懸命に働いてきたつもりですが、何にもならぬ、つまらないことをしてきたようです。

…世間の笑われ者になったつまらぬ母を笑って下さい…」

母の無念が、自分を責め立てているように感じると同時に、「どうしてこのような手紙を…」と、ただただ戸惑い、やり切れない思いのまま時間ばかりが過ぎていきました。

そして訪れた息子・俊明さんの死。美智子さんにとって思いもよらない別れでした。

息子を亡くし、寂しくぼっかりと空いた美智子さんの心。

その思いが募れば募るほど、美智子さんの心の向かう先は、夫の母のことでした。

「あんなあ…。いっつもこの御霊様と話するとなあ、あの子が答えてくれるんよ…」

今にも崩れ落ちそうになる彼女を、優しく抱



きかかえてくれたのは、まさに義母のその言葉  
だったのです。暗闇に差し込んだ一筋の光。

そして、美智子さんは、ずっと捨てられずに  
いたあの手紙を何度も読み返します。

親となり、子どもが居なくなるという悲しみを  
味わった今では、どれほどまでに子どものこ  
とを願い、期待に胸を膨らませ、愛情を注ごう  
としていたのか、当時の義母の気持ちを思うと  
心が痛みます。

晩年義母は、美智子さん夫婦を訪ねました。  
立派に構えた会社のビルを眺めながら、大変喜  
んでくれている姿が美智子さんの目に焼き付い  
ています。

美智子さんは、亡くなった息子の写真を前に  
して、「今日は孫が運動会だよ。あんたの姪に

なるんだよ。けが過ちがあつちやいけないし、  
祈ってくれる？」。運動会が終わると、「無事  
に終わったよ。ありがとうね」と語り掛けます。  
心配は息子に預けると、不思議と安心に変わ  
ります。

困った問題に突き当たった時も、「どうした  
らいいと思う？」と息子に話し掛けると、フツ  
と良い考えが思い付くことがあります。息子  
から告げられているかのようでした。

今日も、瀬戸の海はいつもと変わらぬ表情で  
美智子さんを迎えてくれます。大好きな風景。  
息子が亡くなったころは、まぶたから溢れ出る  
ものが邪魔をし、来る日も来る日もあの赤い鳥  
居は霞かすんで、よく見えませんでした。

しかし今では、義母と同じように、息子に語

り掛け、そして息子に励まされ、以前にも増して、色鮮やかにそれは映るのです。

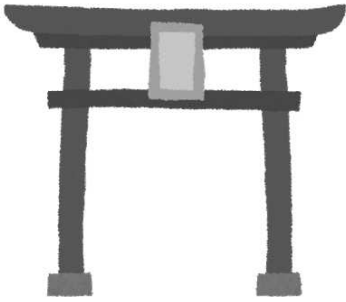
## 「神様が与えてくれた仕事」

北海道函館市に住む若林憲章さんは昭和二十六年生まれで現在六十二歳。

恵まれた家庭に生まれましたが、高校生の時、青年特有の悩みを持ち始めます。「何のために生きているのだろうか、なぜ勉強しなくてはいけないのか」と。

その時、憲章さんの向かった先は函館市内にある金光教亀田教会でした。幼いころよりお母さんに連れられてお参りしていたところですから、教会の先生に悩みを打ち明けると、先生は親身になって話を聞いてくれました。

憲章さんは、「神様のことはよく分からないが、この先生にすがっていけば自分の悩みも解



決していくかもしれない」と思えたのです。その後は教会参拝を続け、先生に悩み事を聞いてもらい、先生と一緒に神様をお願いしていると、少しずつではあるけれど、暗闇に光が差すような気がしてきました。

ところが大学受験には失敗、先行きの見えぬ不安は続きます。そんな中、ある知り合いの紹介で、眼科の病院に就職することが決まりました。教会へお参りに行き、就職することを報告すると、憲章さんのことを毎日神様にお祈りしてくれていたのでしょう、教会の先生はとても喜んでくれました。

憲章さんが就職したところは函館市内でも大きな眼科医院で、一日に五百人以上の患者さんが来院します。憲章さんに求められたのは、視

能訓練士になってお医者さんを手伝うことでした。視力の「視」に能力の「能」と書いて「視能」、視能訓練士はその当時新しく定められた国家資格で、お医者さんの指示のもと、目に障害のある人に対する機能回復のため、矯正訓練や必要な検査を行うのです。

憲章さんは院長先生から、東京へ行き、その資格を取ってくるように言われました。

上京後、目標が定まった憲章さんはしっかりと勉強し、お医者さんと肩を並べるほどの知識を得ました。すると欲が出てきます。医者になれば良かったと。しかし、院長先生から資格を取るように託されている手前、途中で辞めるわけにもいきません。

医者にといい思いを抱きつつも、二年後には

資格を取って東京から函館へ戻り、視能訓練士として病院で働き始めました。

職場では無難に仕事をこなしていきつつも、どこか充実感が得られません。それは、どんなに適切な矯正訓練や検査をしても、結局手柄はお医者さんに取られてしまうような気がするからです。思い詰めて仕事を辞めてしまおうと思いついて、教会へ行きました。その時、教会の先生は次のように言ったのです。

「あなたは一番大切なことを見失っています。あなたの仕事は神様が与えて下さったものとは信じています。あの時、あなたにこの仕事を与えられて、誰よりありがたく思ったのは、私だったと言ってもよいでしょう。だから私は忘れられないのです。あなたもまたそのことを忘

れない限り、神様の恩恵はあなたの上に豊かに輝くでしょう」

先生のこの言葉を聞いても、憲章さんには仕事を辞めたい気持ちが残りませんでした。「神様がくれた仕事だったら、どうしてもっと自分に向いた仕事じゃないのか」と思ったのです。ただ、自分のことをずっと見守り続け、祈り続けてくれていた先生が言うのだから、もう少し頑張ってみようかと思いついて、仕事を続けていきました。

そんなある日のこと、患者さんから、「あなたがとうございました」と言われ、ハツと思つたのです。ただ自分がしていると思つていたことが、患者さんに喜んでもらえているんだということ。

それからは少しでも患者さんに喜んでもらえ

るように心掛けていきました。すると、視能訓練士という仕事は、ただ訓練したり検査するだけでなく、患者さんの心配や不安を少しでも和らげることが出来ることに気付いたのです。

例えば、まだ幼い子どもさんが検査の結果、弱視ということが分かり、眼鏡を掛けることになります。その時、お母さんが悲しい顔をしていては子どもが不安になるので、お母さんには笑顔で接するよう促します。

また、お母さんに次のように話します。「家に帰ったら、お祖父ちゃんお祖母ちゃんにも協力してもらって下さいよ。『可愛い孫に眼鏡なんて、可愛そうに』という風になると、子どもさんが眼鏡を掛けたくなくなります。今この時期に眼鏡を掛けることが本当に大切なので、

『眼鏡を掛けて偉いねえ』と褒めてもらうようにお祖父ちゃんお祖母ちゃんにも話して下さいね」とお母さんに伝えます。

患者さんへのこのような心配りを心掛け、一日も休むことなく早朝から深夜まで働き続けていきました。「何のために生きるのか」と悩んでいた憲章さんが、患者さんに喜んでほしい、そして、少しでも人様のお役に立ちたいという思いに変わり、そのことが生き甲斐となり、結局四十一年間無事に仕事を勤め上げたのでした。

退職後、憲章さんは視能訓練士の資格を取ろうとする若者たちを専門学校で教えています。その講義の中で、患者さんの病気が治っていくことはもちろんのこと、心も助かっていくこと

が大切だと強く訴えています。それは、どんなに的確な検査や訓練が出来ても、患者さんの心が元気になるなければ、良い治療にはならないと思っっているからです。

視能訓練士という仕事は、患者さんの心のケアまで配慮出来る仕事であり、今は本当に神様が憲章さんに与えてくれた仕事だったと思っっています。今日も、教会へ参拝し、神様にお願いしながら、後輩たちの指導に取り組む憲章さんです。



「心の美人になりたくて」

「全て神様のおかげです」と、優しいまなざしで語ってくれる藤本美子さんは、現在六十三歳。祖父から続く信心を受け継いでいます。

幼稚園まで金光教の中心である岡山県金光町で暮らしました。生まれた時に当時の教主金光様から、漢字で、「美しい子」と書く「美子」という名前を付けてもらいました。神様が、「美しい心の人間になりなさい」と願って下さつての名前だと思い、心の美人になりたいと願って今日まで生きてきました。

今から二十一年前の春、美子さんが四十二歳の時です。四十七歳のご主人が会社に行く途中で突然倒れてしまい、救急車で病院に運ばれま

した。呼吸も心臓も停止状態でした。

当時ご主人は、銀行の支店長をしており、「お客さんのためにも、家族のためにも、ここで頑張らないといけない」と、自分に妥協を許さず働いていました。人を大切にする性格から、たくさんの人たちに信頼され、また、家族であるご両親、三人の子どもたち、美子さんにとっても深い思いやりのある人でした。

病院で何とか命を取り留めることは出来ましたが、意識は戻らず、日常生活全般が一切出来ない状態になってしまったのです。

けれども美子さんは、嘆き悲しむことはありませんでした。それは、「無い命であったのを神様が救って下さったんだ」と感じたからであり、また、「神様はどこにでも居て下さる。何

があっても神様のなさることとして全てを受け止めよう。神様のなさることに無駄事はないはず」と、強い思いを持ったからです。

病院治療の一年後には自宅療養をすることにになりました。それからの介護生活は、片時も目を離せない大変なことでした。ご主人が息を詰まらせないように一日何回も痰たを吸い取り、鼻から流動食を入れて命をつなぎました。

周りの人たちはみんな、「大変でしょう」と、美子さんを気の毒がってくれました。中には、「あの時に亡くなっていたら、こんな苦勞をすることもなかったのに」と言う人もいました。美子さんにとって愛する夫を無意味な命と見られることは大変つらいことでしたが、自分の心を奮い立たせて、神様に命あることのお礼を申

しながら介護しました。

ご主人は、話も出来ず目の前にいるだけでしたが、ここに愛する夫がいるということがありがたく心強く、家族みんなを大きな力で守ってくれていると感じられました。

「夫にとっては仕事が出来なくなったことは悔いが残ったかも知れませんが、私にとっては心の持ちようが大きく変わりました。神様の大きな愛に包まれる中で、これを機会にして心の美人になるための勉強をなさいというお示しを受けたように思うんです」と、美子さんは言います。

もちろん介護生活をする中で、ご主人に相談したいと思うことは度々ありました。思春期の子どもたちの様々な問題や進路のことです。ま

た、落ち込んだこともありました。そんな時には教会に電話して先生に相談し、アドバイスしてもらったり、心のもやもやを聞いてもらいました。

今年の一月、ご主人は亡くなりました。介護を始めてから二十年と十カ月の間、頑張つて生き抜いてくれました。ある朝、目が覚めると、静かに旅立っていました。ご主人の体調は、昨年の夏から悪くなっていたので、新年のお正月を一緒に迎えさせてもらえたことがありがたく、突然の別れに落ち込むことはありませんでした。「夫は亡くなつてからも家族みんなをいつも見守ってくれている」と確信しています。

美子さんは、「夫と夫の両親を看取らせてもらったのも、私自身が元気でいさせてもらった



のも、全てのおかげです。私の祖父は、いつも何に對してもありがたいと言ひ、感謝の心で生活を送つてきました。今、私自身がありがたいと思ふ心でいっばいなのは、祖父の信心の影響と神様のおかげだと思います。私は、たくさんの方々に支えてもらひ、お世話になり、生かされてきたんです。だから、お礼の心をもつと持たせてもらわないといけません」と、にこやかに話してくれました。

葬儀の時には、会葬してくれた人たちから、「ご主人は幸せだったね」と言つてもらひ、感激しました。

現在、美子さんは、教会のお祭り日はもちろんのこと、日々のお参り、お手伝いをさせてもらう中にも、神様にお礼申し上げることを欠か

しません。お茶をたてたり、料理を作る時にもお礼の心を持つて謙虚に取り組んでいます。そんな美子さんの魅力に引かれて、たくさんの人が周りに集まつてきます。

「私は、人の話を聞いてあげたいし、その人のことを祈つてあげたいんです」と、瞳をキラキラさせて美子さんは言い切つてくれました。

「夫がいるから私がいる。私がいるから夫がいる。二人で一つだったんです」と話す美子さん。言葉は交わさずとも、心は通い合い、お互いに支え合つてきた二十年でした。今日まで共に生きてこられたことがうれしく、これまでのことは全て神様のおかげであり、神様のなさることに無駄事はなかつたと実感されているそうです。

長年にわたって懸命の介護をされ、ご主人のいのちを輝かせたことが、同時に美子さん自身のいのちをも輝かせることになったのです。

心の美人を目指して、今日も笑顔の美子さんに、ご主人も神様もほほ笑んでおられます。



**金光教本部 ラジオ放送係**

**住所** 〒719-0111  
岡山県浅口市金光町大谷320

**電話** 0865-42-6453

**FAX** 0865-42-2114

**メール** w-master@konkokyo.or.jp

# KONKOKYO

北海道放送 土曜日 あさ5時10分  
東北放送 日曜日 あさ5時00分  
ニッポン放送 日曜日 あさ4時30分  
東海ラジオ放送 金曜日 あさ5時25分  
和歌山放送 日曜日 あさ6時50分  
朝日放送 水曜日 あさ4時50分  
山陽放送 日曜日 あさ6時35分

中国放送 土曜日 あさ5時50分  
南海放送 日曜日 あさ6時00分  
RKB毎日放送 日曜日 あさ6時50分  
宮崎放送 日曜日 あさ7時10分

ここで聴くおはなし

検索

